2021年度　創価大学法科大学院

S日程・A日程　小論文審査

問題１（配点50点）

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。なお、【　】は出題者によるものである。

わたしたちの生きているこの社会は成熟した社会なのか、それともただの幼稚な社会なのか。そんな問いを立てたくなるような状況がある。とくに何かの技量を身につけることがなくてもなんとなく生きてゆける、自活できなくても「一人前」にならなくても、まあそれなりに生きてゆける…。大半のひとがそのように感じながら生きてゆける社会は、セイフティ・ネットがほんとうに完備しているならばの話だが、たぶん成熟しているのだろう。とすれば、「一人前」にならなくても政治にかかわれる、経営もできる、そんな社会こそもっとも成熟した社会であると、皮肉まじりに認めるよりほかないのだろうか。

【中略】

成熟とはまずはひととして自活できるということであろう。食べ、飲み、衣をまとい、居場所をもち、仲間と交際することが独力でできるということ、つまりは自分で自分の暮らしをマネージできるということであろう。もっともひとは生活を他のひとと協同していとなむという意味では社会的なものであって、だから成熟とは、より正確には、社会のなかで自分たちの生活を自分たちでマネージできるということである。そのかぎりでひとにおいて成熟とは、その生活の相互依存ということを排除するものではない。産み落とされたとたんに見捨てられ、野ざらしになって死にっきりということがわたしたちの社会ではよほどのことがないかぎりありえない以上、生まれたときもわたしたちは他のひとたちに迎えられたのであり、死ぬときも他のひとたちに見送られる。だれもが、生まれるとすぐだれかに産着を着せられ、食べさせてもらうのであり、死ぬときもだれかに死装束にくるまれ、棺桶に入れてもらうのである。

成熟は成長とは異なる。成長は、誕生－成長－衰退（老化）－死という、生のリニアな過程のなかにその一フェイズとして位置づけられる。人間の場合は、ほとんどすべての社会で、この生き物としての成長（身体とその能力の成長）の過程にさらに子ども／大人という区分が重ね描きされている。生物学的な成長の区別だけではなく、社会的な承認／未承認という規範的な区別が、ひととしての生の過程のなかに差し込まれるということである。だから、【　①　】者もいるし、幼くしてすでに成熟している者もいる。

ところが、生産手段の機械化とともに社会が幼い子どもたちを早くから労働力として求

めなくていいほど「豊か」になり、かつ社会のシステムが肥大して「大人になる」ために修得しなければならない知識や技術の量も飛躍的に増大するなかで、学習の期間がどんどん長くなり、いまや大半の子弟は保育園から高校卒業まで十五年間ほど、大卒の場合だと十九年間、学校という集団教育の場で生活することになった。大人になるための通過儀礼が学校教育として制度化されることで、いまや子どもと大人のはざまが膨れ上がり、「純粋」な子どもである期間よりも、子どもから大人に移行する、子どもか大人かよくわからない期間のほうが、はるかに長くなった。さらに卒業して会社に入ってもやはり最後まで「階段」を上らねばならず、つねに「成績」が問題とされ、ついに「窓際」に追いやられるまで、会社もほとんど学校のようなものとなった。いつも途上にあるものとして、生涯自分をまるで通過儀礼中の存在であるかのように感じるという、奇妙な時代になった。中高年も未成年もみな、自分が大人か子どもかわからない、そんな奇妙な社会である。

そしてそのような社会のなかで、わたしたちは〈いのち〉のベーシックスのほとんどを、専門家による社会サーヴィスに委ねている。そして、いざというときに何をしたらよいのか呆然とする、そんな受動的で無力な存在になっている。これ以上向こうに行くと危ないという感覚、あるいはものごとの軽重の判別、これらをわきまえてはじめて「一人前」だったはずなのに、その危機感覚、その価値の遠近法がわたしたちのなかから消えかけている。「われわれは絶壁が見えないようにするために、何か目をさえぎるものを前方においた後、安心して絶壁のほうへ走っている」――。パスカルが紙片に遺したこの言葉が異様なほどリアルに響くのが、わたしたちの時代だ。

時代がその構造の硬直によって破綻しかけているときに、その構造変換のエネルギーと智恵を供出しうるのは、この社会、この時代の〈外〉にあるもの、ありうるものへの感受性である。そうした〈反世界〉へのまなざしとでも言いうるものこそが、この世界を脱臼させ、世界をふたたび可塑的なもの、流動的なものへと戻し、ひいては世界を生きのびさせもする。世界を別様にも想像しうるということ、そのことが世界の変動期にあってはもっとも必要なものだ。そこでは、わからないもの、理解できないものに開かれていることが大きな意味をもつ。【中略】わからないことがらに対処する智恵をもつということが成熟であり、わからないことがらを手持ちのわかっていることがらに還元するのではなく、わからないことがらについての感受性をたっぷりもって開きっぱなしになっているというのが大切なことなのである。そしてこれこそ、未熟者の特権なのである。

なぜ、未熟さを生の奥深くまで孕んでいることが重要なのか。一見無駄とか、夢想だとか、非合理だとか、非現実だとか見えるものは、この世界にうまく位置づけようがないという意味で、この世界の枠外に放逐される。が、この〈外〉こそ、「大人」たちがかまけている社会のロジックを相対化するものである。このことに関連して、井上ひさしさんがこんな指摘をしている。

昔話の伝わり方を考えてみますと、祖父母から孫です。老人たちは世の中から引退している。子どもたちはこれから育ち、世の中へ参加しようとしている。世の中を通り抜けて来て生の国から死の国へ移ろうという人たちと、生の国から生れてきたばかり、これから世の中へ出ていくひとが、いろり端やふとんのなかで結びつく。両者のあいだにいる親たちは世の中に出て一所懸命働いている。その親たちもやがて年寄りになる。そして今度は子どもたちが親になる。その子どもとかつての親がまた話する。このように互い違いになりながら話や体験が伝わっていく。

（「老＝若・男＝女の対称性」）

こういう老人と孫とのつながりが、「大人」の世界の対極としてあって、その両極性が、表と裏、中心と周縁、上と下、海と山、天と地、昼と夜、夏と冬と同様、文化の活力を生んでいたと、井上さんは言う。「生れてきて五、六年の命と死ぬまで五、六年の命が、真ん中に働くお父さん、お母さんを置いて向い合う。この対称同士が互いに結びついて、やがて真ん中の働く者を創ってゆく。この対称性があらゆるところからなくなっていっており、社会的な活力が落ちている」、と。

ここから考えられるのは、老性と幼性には、枯淡とか弱々しさ、しおらしさと可愛らしさ以上に、破壊的な性格があるのではないかということである。それは「大人」の観念によってかたちつくられてきた秩序を一時失効させるような、あるいは破砕するような、そういう破壊性である。そういう〈反世界〉を醸成するものとして、老人と子どもの隔世代的なつながりがあったと、井上さんはここで言いたいのではなかったか。そしてそのことが〈世界〉というものを厚くしていた、と。

それはあきらかに「大人」たちがかまけている「成長」とそのための効率性の論理の裏側にあるものである。成熟もまたそのような破壊性を内蔵したものとしてイメージする必要があるのではないだろうか。いつでも（世界の〈外〉に出るという意味で）未熟になれる可能性を含んだものとなってこそ、ひとは成熟したと言えるのではないだろうか。そしてさらに言えば、子どもが一日も早く大人の世界――「成長」とそのための効率性の論理に支配される社会――に参入することを求められるのではなく、子どものままで子どもとしてのあり方を享受できるような社会、老人が老人として大人の世界から退場してゆくのではなく、老いの時期としての時間に重要な意味を見いだしながら生きてゆける社会、それが成熟した社会というものではないだろうか。

もういちど言っておこう。これ以上向こうに行くと危ないという感覚、あるいはものごとの軽重の判別、これらをわきまえてはじめて「一人前」である。ひとはもっと「【　②　】」に憧れるべきである。そのなかでしか、もう一つの大事なもの、「未熟」は護れない。われを忘れて何かに夢中になる、かちっとした意味の枠組みに囚われていないぶん世界の微細な変化に深く感応できる、一つのことに集中できないぶん社会が中枢神経としているのとは異なる時間に浸ることができる、世界が脱臼しているぶん「この世界」とは別のありよう

にふれることができる、そんな、芸術をはじめとする文化のさまざまな可能性を開いてきた「未熟」な感受性を、護ることはできないのである。

（出典）鷲田清一「未熟であるための成熟？―市民性について」『わかりやすいはわかりにくい？―臨床哲学講座―』（筑摩書房、2010 年）

【設問 1】

空欄【　①　】に入る文（句）を、本文中の単語を用いて、20 字以内で書きなさい。

【設問 2】

空欄【　②　】には、本文中でも用いられている、ある単語が入る。空欄②に入る適切な単語を書きなさい。

【設問 3】

下線部で筆者は、護るべき「もう一つの大事なもの」として、「未熟」を挙げている。では、ここで筆者が考えている「未熟」以外のもう 1 つの大事なものとは何か。100 字以内で説明しなさい。

【設問 4】

筆者によると、成熟するとは、どういうことを意味するか。300 字以内で説明しなさい。

以上

2021年度　創価大学法科大学院

S日程・A日程　小論文試験

問題２（配点50点）

以下の設例に記載された内容を前提に、設問に答えなさい。

【設例】

大学４年生のＡ子、Ｂ男、Ｃ子が間近に迫った就職活動などについて話をしていたところ、Ａ子から以下のとおりの話が切り出された。

Ａ子：私、整形しようと思うんだ。

Ｂ男：親からもらった体を人為的に変えるなんて親に失礼じゃないか。特にお母さんはひどく悲しむと思うぞ。

Ａ子：そうは言っても自分の鼻の形が本当に嫌いだから変えたいの。

Ｂ男：僕は君の鼻の形に違和感はないし、かわいいと思うよ。

Ａ子：同じ大学のサークルのＤ美の鼻はとてもきれいでしょ。一緒にサークル活動していると、コンプレックスでいつも落ち込んじゃうのよ。

Ｂ男：Ｄ美は整形しているかも知れないんだから、君が劣っていると決めつける必要はないだろう。

Ｃ子：確かに、Ｄ美は高校卒業した直後に整形したって聞いたわ。Ｄ美より見劣りするからといって落ち込む必要はないわ。

Ａ子：でも、顔が整っている方が就職にも有利でしょ。私、いい会社に就職したいもの。

Ｃ子：噂だけど、一流企業の女性採用にはその傾向があるということで、女子学生は戦々恐々としているわね。

Ｂ男：顔の美しさで採用を決めるなんて、そんな会社はいい会社じゃないよ。それに、採用後に整形だと分かったらクビになるかもしれないじゃない。

Ａ子：でも私、引っ込み思案で消極的でしょ。顔にコンプレックスがあるから自分に自信が持てないからだと思うの。

Ｂ男：Ａ子は成績も良いし、僕たちに対する人当たりも良くて人望もあるのだから、もっと自分に自信を持った方がいいよ。

Ｃ子：確かに、Ａ子は賢明で人との接し方も良いから、営業職として商談に臨む仕事がぴったりだとゼミの教授も太鼓判を押していたわ。

Ｂ男：それに、君が顔の美しさに優越的価値を認めるなら、それはもはや優生思想であ

り、美しくない顔の遺伝子を残さないという考えになってしまうよ。

Ａ子：私は、ちょっと鼻を整形するくらいなら、誰でもやっているお化粧と変わらないと思うわ。だから、誰でも気に入らない部位があれば整形して満足して生きていけば良いと思うわ。

Ｂ男：それに整形費用がかかるし、結構高額だ。そのままならお金がかかることはないし、もったいないじゃないか。

Ａ子：でも、いい会社に就職できればそのくらいの出費は収入で十分取り返せるし、整形して顔に自信が持てれば、これまでかかっていた化粧品代もあまり必要なくなるから、もったいないとは思わないわ。

Ｃ子：就職した先輩に聞いたけど、確かに、一流企業に就職できなかった場合の収入と比べれば、整形費用の分くらいは収入に差が出ることは間違いないわね。でも、整形費用はどうやって捻出するの。

Ａ子：親には言えないから、アルバイトで稼ぐつもりよ。大丈夫。

Ｂ男：整形って手術でしょう。手術の失敗や手術後の治療とかはどうなの。

Ｃ子：鼻の整形手術を体験済みの先輩に聞いたことがあるんだけど、手術の失敗は多くはないけど希にあって、失敗じゃなくても手術後は長いと一か月位顔にテープを貼ることもあるそうよ。期間は個人差があるそうだけど。

【設問】

上記のＡ子、Ｂ男、Ｃ子の話の内容を前提に、その内容を用いて、①Ａ子に整形を止めるよう説得する最も説得力があると考えられる内容及び②Ａ子に整形を止めさせるよう説得する根拠として説得力に乏しいと考えられる内容とその理由につき、500 字以内で記述しなさい。